

# 大分合同新聞

## ワークシート

### 同音異義語で文章を面白く

年 組 名前

#### 東西南北

2016.10.5

「何か一つでも人のためになることができないか、いつも考えてきた」。熱帯感染症の特効薬を開発した大村智・北里大特別栄誉教授(81)は1年前、そう



東京工業大栄誉教授(71) 顔写真がノーベル医学生理学賞に輝いた。生命活動を担うタンパク質がどうやってできるかに注目が集まる時代に、細胞がタンパク質を廃棄し、リサイクルする仕組み(自食作用)をこつこつと解き明かした。その原動力は「生命現象の真実を明らかにしたい」という純粋な好奇心▼大隅さんの研究仲間は今回の受賞を心から喜ぶ。基礎研究の大切さを日本中に知らしめ、それに取り組む人々を勇気づけるからだ。政府の研究費や大学、企業でも目先の成果が重視される時代。「何の役に立つの?」

と言われる基礎研究は肩身が狭い。ノーベル賞の選定ですら応用色が強まっている▼大隅さんはストレートに語る。「科学が『役に立つ』という言葉が社会を駄目になっている。本当に役立つのは100年後かもしれない。将来を見据え、科学を一つの文化として認めてくれる社会を願っている」▼「基礎」と「応用」は、いわば車の両輪。もつと長期的な視点から基礎研究に光を当て、若い研究者たちに「辞職作用」が起きないようにしなければ...と思つ。

(2016年10月5日付朝刊1面)

① この「東西南北」のようなスタイルの新聞上の文章を、カタカナ3文字で何と呼ぶでしょうか。

( コラム )

② 大隅さんが願う社会の在り方を、本人が語ったことから短くまとめましょう。

科学を一つの文化として認めてくれる社会

③ この文章は、2つの「同音異義語」を活用することでより面白くなるよう工夫されています。2つの言葉を探し、抜き出しましょう。

( 自食作用 ) と ( 辞職作用 )